

バードリサーチ  
鳥類学大会 2025

JBRA  
Ornithological Conference 2025

講演要旨集

# 目次

---

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p02
2. 大会概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p03
3. 参加方法説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p04
4. スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p08
5. プログラム・講演要旨・・・・・・・・・・・・ p08

# 1. はじめに

バードリサーチは、全国の会員と共に鳥類の生息状況などのモニタリングを行うと共に、鳥類学の発展のために、様々な活動を行っています。

新しい方法で鳥の世界を見せてくれる研究や鳥の保全に関係する研究には多くの人が心を動かされます。また、マイフィールドでの地道な記録の積み重ねや、そこから得られるインスピレーションもとても大事です。

そこで、バードリサーチでは、鳥類の調査や研究成果について、オンラインで学会形式の発表や交流の場を設けることにいたしました。いろいろな立場で研究をする人、調査研究に興味をもつ人、研究成果から学びたい人など多様な人が鳥の調査や研究について、気軽に見聞きしたり議論したり、仲間を増やしたりできる場を提供します。

**大会名称：**バードリサーチ鳥類学大会 2025

**大会英語名称：**JBRA Ornithological Conference 2025

**会期：**2025 年 12 月 12 日（金）、13 日（土）

**主催：**特定非営利活動法人バードリサーチ

**協賛：**一般社団法人ヒマラボ

**大会運営スタッフ：**

この大会はボランティアとインターンの皆様のご協力により運営しています。

口頭発表接続テスト：天野孝保

口頭発表司会進行：大橋美幸 長久保定雄 甲藤知之

口頭発表質問対応：安田耕治 加藤義清

ポスター発表会場設営／講演要旨集：谷田部佑

ポスター会場イラスト提供：カトウアヤコ

バードリサーチスタッフ：高木憲太郎 植村慎吾 神山和夫 守屋年史 姜雅珺 藤原敦子



本大会は一般社団法人ヒマラボより協賛をいただいています。

一般社団法人ヒマラボは「市民の探究心や研究的な姿勢を涵養し、好奇心の毀損されない、市民自ら新たな知を生み出す「創造社会」の実現」を目的に掲げており、本大会の取り組みがその目的と合致していることから協賛いただきました。

## 2. 大会概要

---

### 口頭発表 [YouTube]

12分発表+5分質疑です。PowerPoint、Keynote、PDFで作成したファイルをZoomの画面共有を使って発表します。映写する画面のサイズは16:9を推奨しますが、4:3でも発表は可能です。聴講はYouTubeを使用し、質疑はYouTubeのコメント欄を使用します。

### ポスター発表 [oVice]

ポスターはPDFで作成してください。PowerPointやKeynote、Canva、googleスライドなどを使って横長スライド6~10枚程度にまとめ、PDF化したものを準備してください。スライドは縦に並んで聴講者に表示されます。対面開催の学会発表用などにA0サイズで作成したポスターがある方は、それをPDFにしたものでもOKです。ファイルサイズはあまり大きくならないよう調整をお願いします。10MB以下が理想です。

会場にはoViceというバーチャルオフィスサービスを利用します。oVice上で質疑ができるコアタイムは各2時間半です。現地開催のポスター発表に近い雰囲気を感じてください。

### 表彰 [oVice]

今大会ではポスター発表について以下の2つの賞を設けます。いずれの賞も、参加者全員による投票によって決定します。ポスターをヒマラボ賞の対象とするかは、自己申告によります。

- 1) 最優秀ポスター賞 (JBRAOC2025 Poster session Golden Bird Award)
- 2) ヒマラボ賞 (JBRAOC2025 Poster session Himalab Award)

### 懇親会 [Zoom]

最初の30分はランダムに割り振られたZoomのブレイクアウトルームで自己紹介を交えながらご歓談ください。その後は、自由にルームを移動して話したい人と交流を深めてください。

### 3. 参加方法説明

#### 口頭発表の見方・質問の仕方

口頭発表は、限定公開ページにライブ配信される動画を視聴していただきます。

質問は YouTube のコメント欄＝チャット欄を使用します。ここに記入された質問を、質問対応スタッフがピックアップして、講演者に口頭で質問を伝えます。YouTube に配信される映像は実際よりも数十秒のタイムラグがありますので、質問は早めに記入していただくようお願いします。

コメントを書き込むために YouTube (Google) のアカウントが必要です。大会参加前にアカウントを取得しておいてください。アカウントは複数持つことができるので、普段使っているアカウントを使用したくない場合は、別アカウントを取得しておいてください。



質問の記入には、Google アカウント＝Gmail アドレスが必要です。

詳しくはバードリサーチ作成の Zoom 利用マニュアル

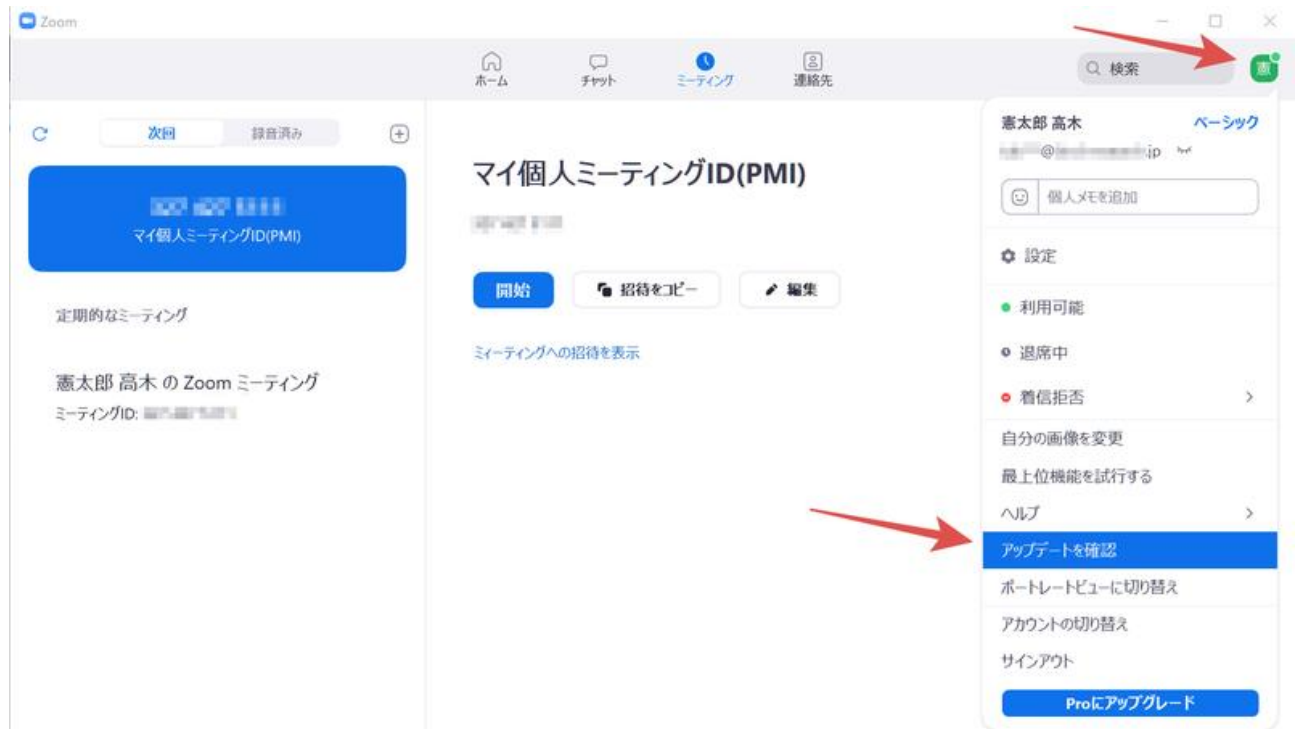
[https://www.bird-research.jp/1\\_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022\\_byBR.pdf](https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf)

の 15 ページ以降に YouTube (Google) のアカウントの取得方法などの説明があります。

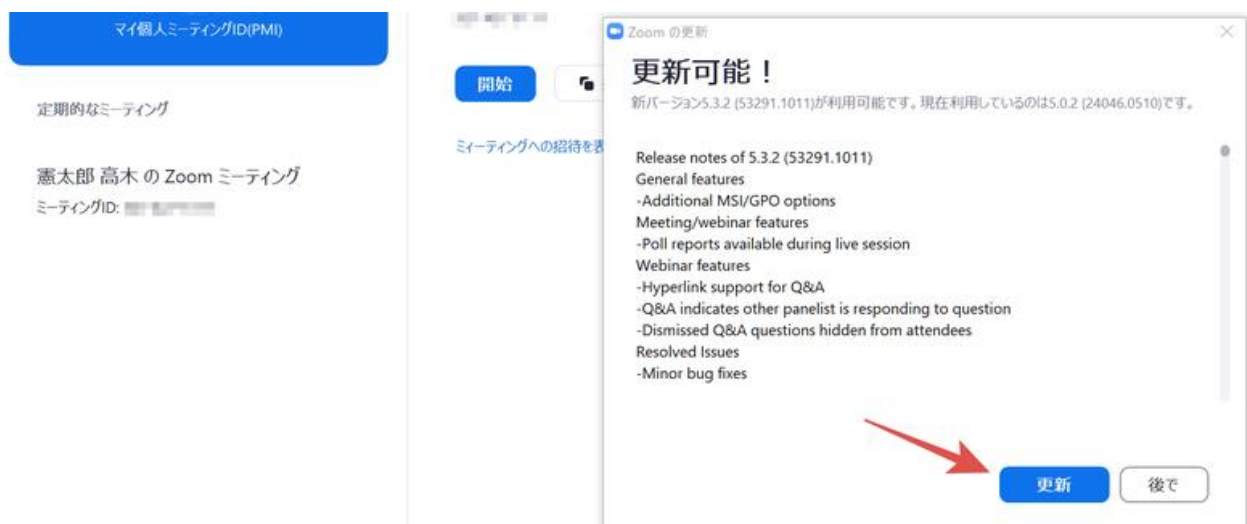
こちらを参照してください。

## Zoom のアップデート確認方法

Zoom の安全性については、2020 年春の段階で、たくさん指摘されていました。しかし、その後のバージョンアップで改善が図られたようです。セキュリティの向上のため、参加される際は、最新版にアップデートをお願いします。



アップデートの確認は、アプリを起動して画面右上のアカウントアイコンをクリック！そして、プルダウンメニューから「アップデートの確認」をクリックしてください。



しばらく待って、「更新可能！」のウィンドが開いたら、青い「更新」ボタンをクリック！これで最新版にアップデートされます。

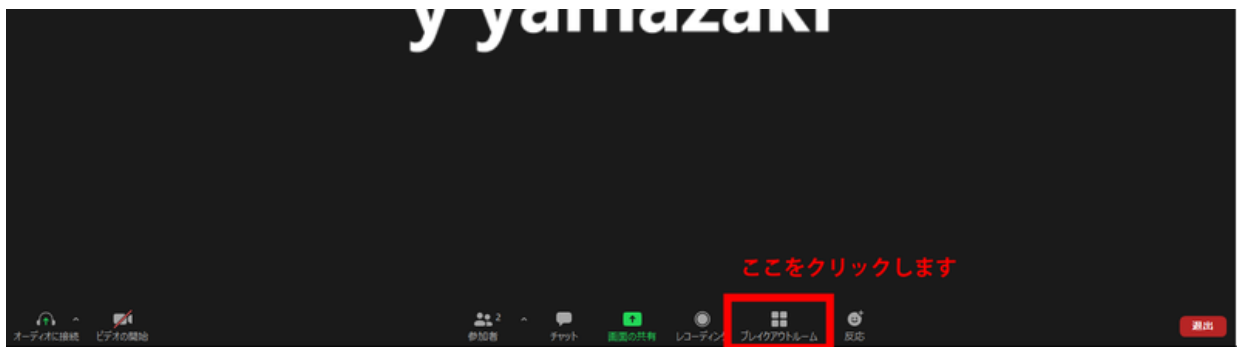
詳しい Zoom の利用方法は下記バードリサーチの Zoom 利用マニュアルをご覧ください。

[https://www.bird-research.jp/1\\_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022\\_byBR.pdf](https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf)

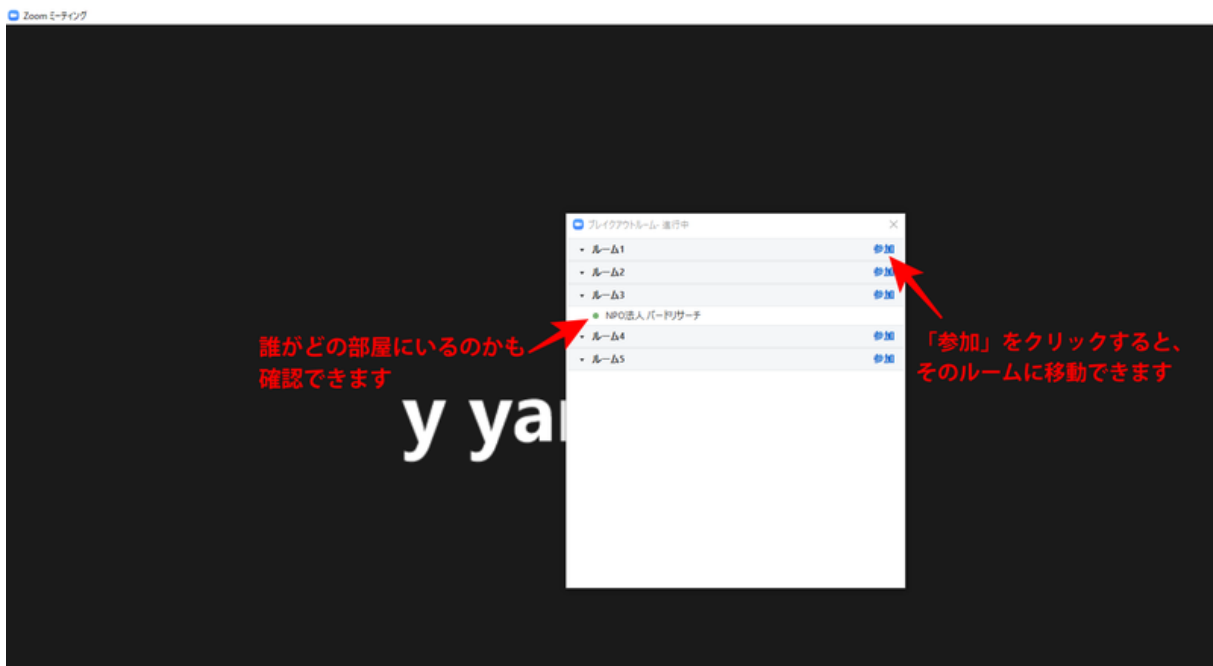
## Zoom ブレイクアウトルームの利用方法

自由集会と懇親会では、複数のルームを Zoom 上に作ります（ブレイクアウトルームという Zoom の機能です）。Zoom の画面の下に「ブレイクアウトルーム」というアイコンがあるので、これをクリックしてください。設定されているルームのリストが表示されるので、好きなルームを選んで移動できます。

※正常にブレイクアウトルームを使用するためには、Zoom アプリのバージョンは 5.3.2 以上が必要です。



Zoom 画面にカーソルを移動させて、画面下メニューを表示させます。「ブレイクアウトルーム」をクリックします。



ポップアップウィンドが開くので、リストの中から好きなルームを選んで「参加」をクリックしてください。※上記の画面は Windows です。iPad などではメニューの表示方法が異なります。

## ポスター発表の見かた（入室について）

ポスター発表の質疑は、oVice という平面のバーチャル空間上で行います。oVice のアカウントを登録しなくても、表示名の入力だけで参加が可能です。空間内の移動や、ポスターの表示・非表示、会話の成立には、少しコツがあり、慣れが必要です。

1920×6400 ピクセルの縦長の Web スペースにポスター番号と発表者名が掲示され、アバターと呼ぶ自身のアイコンを近づけるとポスターが開きます。質疑はアバターを近づけて音声のみで行います。

推奨環境は PC となっていますが、スマートフォンでも利用可能です。PC の場合のウェブブラウザは Windows、Mac とも、**Chrome**、**Edge** どちらかの利用が推奨されています。他の環境ではうまく動作しない可能性があります。

入室や入室後の操作について詳しくはバードリサーチ作成の oVice 利用マニュアル

[https://www.bird-research.jp/1\\_event/jbraoc2025/jbraoc\\_oViceManual.pdf](https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2025/jbraoc_oViceManual.pdf)

を参照してください。



## 4. スケジュール



## 5. プログラム・講演要旨

### <口頭発表>

口頭発表 O-01 12月12日 17:00-17:20

### 名古屋市の繁華街におけるスズメの営巣地周辺の環境と幼鳥数との関係

○岡村悠太郎（名城大院・農）、橋本啓史（名城大・農）

近年、スズメの個体数の減少が話題になっている。本発表では、気温をはじめとした営巣環境と巣立ちとの関係を明らかにすることを目的として、名古屋市における市街地エリアで確認された営巣地と、その周辺で見られたスズメの成鳥と幼鳥の比率を比較した。調査は名古屋市中区の錦周辺（繁華街）と白川公園を含むエリアで実施し、調査方法はルートセンサス法で行った。ルート上の気温と成鳥および幼鳥の位置と個体数を記録した。調査は特に暑い時期と営巣時期が重なる7月下旬から8月中旬で行い、計16回の調査を行った。営巣場所の調査は4月～8月の期間で行い、合計23巣を確認できた。その他の結果および考察は当日発表する。

口頭発表 O-02 12月12日 17:20-17:40

## 球磨川河口におけるシギ・チドリ群集の季節/年変動

○高野茂樹

2022年1月～2024年12月に球磨川河口干潟で観察したシギ・チドリ類総個体数や種の変動傾向を求め、群集類似度をもとにグループ化を試み、季節ごとの群集組成を明らかにし、年変動から種個体数変動を探った。月総個体数の傾向は、有意な減少傾向を示し、ハマシギ（減少）、ダイゼン（減少）とアオアシシギ（増加）で有意な変動が認められた。群集組成については、8-9月、4-5月、11-3月、そして10月の4グループに区分され、それぞれは、春の渡り期、秋の渡り期、越冬期そして移行期に相当した。移行期と越冬期の非類似度は比較的小さかった。月毎の群集組成類似度の変動から、2024年4月にはハマシギ、ダイゼンの個体数減少が著しかったことが示された。

口頭発表 O-03 12月12日 17:40-18:00

## 『リュウキュウコノハズクは広告声を用いて強い自分を演出する説』の実証結果

○武居風香、榛沢日菜子、池上隆之、高木昌興（北大・院理）

なわばり防衛は営巣場所や餌資源の確保に不可欠である。リュウキュウコノハズクは防衛時に広告声という鳴き声を用いる。音声には発声個体の形態的・生理的特徴が反映され则认为られている。本研究では、本種の広告声の音声成分と形態値との関係を解析し、さらに高・低周波数の広告声を同一個体へ提示し、その鳴き返しを自発的な広告声と比較した。その結果、広告声の周波数・持続時間・音量比が体サイズと関連し、さらに一部の音声成分が低周波数音源に対する鳴き返しにおいて変化した。以上より、本種は広告声から相手の体サイズを認識し、その特徴に応じて自身の広告声を調整することでなわばり防衛を最適化している可能性が示唆された。

口頭発表 O-04 12月12日 18:10-18:30

## 河川ライブカメラ映像 x 機械学習による水鳥行動分析の試み

～東京都・善福寺川の事例～

○北島直紀（バードリサーチ会員）

本研究では、東京都・善福寺川の河川ライブカメラ群の映像をもとにディープラーニングで機械学習モデルを生成し、水鳥の自動検出・分析を試みた。大量映像を複数種についてラベリングして学習データを整備し、特にカルガモを中心に検出精度を検証した。そのモデルを2025年の実映像へ適用した結果、時刻ごとの出現傾向や増水時におけるサギ類の増加などを可視化できた。今後はモデル精度の向上と個体追跡機能の強化を図る。

口頭発表 O-05 12月12日 18:30-18:50

## 鳥類の翼筋肉とその操縦性：種間比較の視点から

○簗島あすか、村上正志（千葉大学大学院）

鳥類の多くは飛翔によって移動するが、その飛翔形態は種によって大きく異なる。鳥類は空中から水中まで地球上の多様な環境に生息しており、それぞれの環境に適応した飛翔様式をもつ。生息環境によって障害物の量は異なるが、障害物が多く複雑な環境に生息する種ほど、高い翼の操縦性が求められると考えられる。ここで、操縦性を支える筋肉に *biceps slip* と TPB がある。先行研究では特定の種においてこれらの筋肉の機能が示されてきたものの、多種を対象とした比較は行われていない。そこで本研究では、鳥の種間での生態の違いが翼の操縦性に関わる筋肉の発達に影響するという仮説を立て、その検証を試みた。

口頭発表 O-06 12月13日 10:00-10:20

## 札幌市中島公園におけるオシドリの繁殖地拡大の経緯

○新田啓子（日本オシドリの会）

札幌市中心部の都市緑地において 2010 年以降にオシドリ親子が見られるようになりました。個体数が増加して拡散し、繁殖地が拡大していますが、その発端の 1 つが真駒内地区における繁殖とされます。

2005 年に真駒内曙中学校の校庭の真ん中にあるハルニレの高さ 3m の樹洞でオシドリが営巣し、その後 2007～2012 年に地上 7m の高さにある樹洞で営巣しました。2013 年は校庭に飛来したものの営巣に至らず、その年に中島公園内に営巣した個体の行動を通して、真駒内地区から中島公園に拡散した経緯を報告します。

口頭発表 O-07 12月13日 10:20-10:40

## ヤマシギを捕獲する網と捕獲技術の快～まもなく千羽！？

○石田健<sup>1,2</sup>・宮山修<sup>1</sup>・森田秀一<sup>1</sup>・清正斉<sup>1</sup>・川口秀美<sup>1</sup>・鳥飼久裕<sup>1</sup>・高美喜男<sup>1</sup>（<sup>1</sup>, 奄美野鳥の会、<sup>2</sup>, 元東京大学）

研究目的によっては、鳥を効率よく捕獲できるかが、研究成果の可否を左右する。奄美諸島に固有（繁殖分布）のアミヤマシギを捕獲するために、私たちは唯一無二の網とそれを使う技術を開発することによって、現在までに 850 羽近く捕獲して、標識そのほか多大な研究成果をあげ、ひいては保護にも役立っている。網と開発の経緯、利用方法や結果の概要をご紹介します。この捕獲技術は、ほかの鳥にも応用可能であったり、捕獲方法の開発や工夫の参考になるかもしれないので、発表に対するご意見もいただきたい。

## Who's Next? ～人新世におけるツバメ類の越冬戦略と分布拡大～

○天野チャールズ孝保（長大・院）

人新世以降、私たち人間の活動は地球環境に大きな変化をもたらし、気候変動は多くの生物に新しい地域での分布拡大を可能にしている。日本でも九州南部のツバメや一部の鳥類において確認できる。同様の現象は南半球でも見られ、ニュージーランドではオーストラリア由来のオーストラリアツバメが自然定着し、分布を拡大している。本発表では、日本とニュージーランドのツバメ類に共通する越冬地の土地利用特性を比較し、越冬を成立させる環境要因を紹介する。

### <ポスター発表>

ポスター発表 P-01

## ヤマウコギの果実を持ち去る鳥はいるのか？ートリトマラズは本当に“鳥止まらず”なのかー

○鳥居憲親（長岡市博）、櫻井幸枝（長岡市博）

ヤマウコギはウコギ科ウコギ属に属する日本固有の落葉低木であるが、枝に堅い棘があることから、新潟県中越地域では鳥が寄り付かない木（トリトマラズ）とも呼ばれている。しかし、本種の果実の特徴は鳥を誘引する液果の特徴と一致する。この点から、本種は鳥を誘引し種子散布を行っていると思われるが、実際に野外で本種の果実をどのような鳥が採食しているのかを調べた報告は見当たらない。そこで、新潟県の信濃川河川敷において、本種に飛来する鳥と果実を採食する鳥を2シーズン調べた。調査の結果、本種には複数の科の鳥が飛来し、調査地ではムクドリとコムクドリが主に果実を持ち去っていた。

ポスター発表 P-02\*

## 鳥たちの気象防災講座（風力発電編）

○太田佳似（日本気象予報士会）

鳥たちの渡りに影響する気象現象や磁気嵐。今回は人間活動が影響する例として「風力発電」を取り上げます。網膜上の速度が速いと物体がぼやけるモーション・スミア効果。風車の羽（ブレード）の先端ほど、また風車に近づくほど、鳥にとってブレードは透明になります。そこで、飛んでいる鳥から風車がどう見えるのか調べると「逃げ水効果」や「傘かしげ効果」が起きていました。では、このようなバードストライクを防ぐ方法はないのでしょうか？ブレードを着色する、音を鳴らす、カメラ等で鳥を見つけて風車を止めるなど様々な方策が試されています。ここでは、鳥の渡りに合せた電力損失の少ない方法をみなさんと一緒に模索したいと思います。

ポスター発表 P-03

## 市民参加型 NFC 録音調査の中間報告：運用実績と技術・参加継続の課題

○大坂英樹（トリルラボ） 田米希久代（加賀市鴨池観察館） 櫻井佳明（加賀市鴨池観察館）

2023 年より市民参加による渡り鳥の夜間フライトコール（NFC）録音調査を全国で開始し、29 サイトで計 16,000 時間の録音を得た。自宅録音では有効なデータが多数得られた一方、電池交換・PC 転送・アップロードなど作業負荷が継続の妨げとなり、即時フィードバック機能の不足も課題として示された。野外での技術試行では、指向性マイクの有効性や耐候性・動物干渉など現場特有の問題が明らかになった。今後は録音自動化、可視化、機材の長期運用性の向上により、市民科学を基盤とした自律的環境センシングへの発展を目指す。

ポスター発表 P-04

## 近畿地方中部におけるコシアカツバメの営巣事例

○中津弘

近畿地方中部でのコシアカツバメの営巣事例について報告する。2025 年 5～8 月に 1 ケ所あたりで少なくとも 1 回、計 20 分以上の観察を行い、巣への出入り個体や入口部分での滞在個体が認められたものを利用巣と判断した。32 ケ所で計 73 個の利用巣を確認した。1 ケ所あたり利用 1 巣のみという単独営巣のケースもあったが、多くはコロニー営巣であった。架巢高（直下の地面との相対値）は平均 6.2m（ただし値の範囲大）で、巣の天井および壁面で支持される構造の巣が最も多く見られた。様々なタイプの人工物が営巣に利用され、特に自治体の庁舎や学校等の施設での営巣が多かった。コシアカツバメとスズメ（二次利用）の利用巣の比はおおよそ 3：1 であった。

ポスター発表 P-05\*

## 宮城県中央部（県北南縁・仙台圏）と山形県・秋田県内陸盆地におけるコハクチョウの 2025 年春の渡り追跡 ～カウントと個体追跡で雪解け前線を追って～

○平泉秀樹

宮城県加美町の鳴瀬川上流域はガンカモ類の重要な渡りルートになっており、渡り時期には雪解けが関連している可能性がある（平泉ほか 2023）。通過するコハクチョウは主に県中央部の越冬鳥と考えたが、その後この地域から北上川沿いを北上した標識鳥もいることがわかったため、2025 年春に各地のねぐら利用個体数や標識鳥の調査を高頻度で行って渡りの状況を記録し、加美町では採食水田域の記録も行って渡りと雪解けとの関連の把握を試みた。また、山形県村山盆地から秋田県横手盆地にかけての地域も重要な渡りルートになっていることが明らかになり、雪解けと移動との関連についても情報が得られたので、それらについても報告する。

ポスター発表 P-06\*

## あかぼっぽってどんな子育て？ あかぼっぽとコミュニケーションの姿を見た ～デコイ作戦と親の呼びかけに走り寄るヒナ～

○佐渡志穂里(東京都立国分寺高校)、中村涼乃(東京都立国分寺高校)、板倉詩(東京都立国分寺高校)

アカガシラカラスバト(*Columba janthina nitens*)は小笠原諸島に生息している、カラスバト(*Columba janthina*)の亜種である。絶滅危惧種に指定されており個体数が少なく、その生態はいまだに明確でない。そこで野外での観察、鳴き声の分析を通してその生態を明らかにすることを目的として調査、記録からその意味について考察を行った。アカガシラカラスバトの観察から子育ての際の親子間での鳴き交わしや給餌などの観察からコミュニケーションや行動について考察を行った。調査ではデコイと音声を用いた実験、その反応について観察を行った。また本校で研究を行っているカラスバトとも比較を行いたい。

ポスター発表 P-07\*

## にいがた浜辺のチドリんず 2025 年活動報告

○渡邊キララ(にいがた浜辺のチドリんず)

こんにちは！『にいがた浜辺のチドリんず』です。「シロチドリをふたたび千の鳥に～これから海が大好きになる人のために。海が楽しい場所であり続けるために～」をスローガンに、今年の2025年から新潟県でシロチドリとシロチドリを取り巻く海浜環境の保全を取り組み始めました。2025年はシロチドリ5巣へのチドリ類保護柵を取り付けと、新潟県シロチドリの繁殖期個体数の把握のため調査を行いました。

ポスター発表 P-08

## モテる雄は冬に頑張っていた！

### ミソサザイの雄の越冬なわばりが繁殖成功に与える影響

○惣田彩可(京大・理)

ミソサザイの雄には、繁殖なわばりを越冬期の間に確保し、繁殖期まで防衛する個体と、繁殖期開始後に確保する個体がいる。足環による個体識別を行い、各個体のなわばり形成状況と繁殖状況を調べたところ、非繁殖期になわばりを確保した個体は、より多くの巣をなわばり内に作り、多くの雌とつがいになっていた。これらの雄は、雌にとって魅力的な質の高いなわばりを確保できることに加えて、早期に繁殖を開始することができ、多くの雌とつがいになる可能性が高いと考えられる。

ポスター発表 P-09\*

## 亜高山帯の峠を秋期の日中に渡る鳥たち

○渡部良樹

本州中部の標高 2,000m を越える亜高山帯の峠において、2023 年 10 月 31 日から 2025 年 11 月 10 日までの 10 月中旬から 11 月上旬に、のべ 10 日間、日中に移動する渡り鳥の目視調査を実施した。その結果、アトリ科を主とする 3 目 12 科 27 種 11,104 個体の鳥の移動が記録され、多くは西南西へ飛翔していた。ここでは周囲の山岳を避けた多くの鳥が、標高の低い峠に集中し、渡るものと考えられた。

ポスター発表 P-10\*

## あしびきの山鳥の尾の しだり尾は いつ抜ける？

○吉村正則

ヤマドリの尾羽は換羽によつての季節的な変化はあまり知られていない。経験的には夏に尾羽が短くなるのは分かっていたが、何時頃から尾羽が短くなり、伸長が完了するのか分からなかった。本研究では、2004 年～2025 年の約 20 年で有効な成鳥♂53 個体、255 件の尾羽の節を数えて、季節による節数の情報を整理した。また、得られた結果から尾羽の伸長速度を推測する事を目的とした。

ポスター発表 P-11\*

## 野鳥の識別技術を持たない人はどのように種を認識し識別しているのか

○佐藤悠子（新潟県愛鳥センター）

野鳥の識別技術を持たない人の種の認識や表現、識別方法を理解し、問い合わせへの回答の精度を向上するため、誤同定の事例と、説明のみをされた場合で正解の種が確認できた事例を記録した。誤同定を 84 例、説明と正解の事例を 17 例記録した。同じ目間での誤同定が多かったが、別の目との間の誤同定も生じていた。識別技術を持たない人の識別方法を検討した結果、姿のみの情報から識別され、解像度は低く、知っている種の中から選択されるためよく知られている種名になりやすい等の傾向が見られた。また、大きさや特徴の認識や表現には個人差が大きいことがわかった。

ポスター発表 P-12

## 北大植物園所蔵サンショウクイ標本 6 体の形態的特徴：既報データとの比較○

三上かつら（バードリサーチ）

北大植物園が所蔵する明治・大正期のサンショウクイ標本 6 体について、計測・観察を行い、既報の *P. divaricatus* ならびに *P. tegimae* の形態データ（Mikami 2016）と比較した。6 体の自然翼長はいずれもの既報の *P. divaricatus* の範囲内だった。採集月不明のブラキストン標本の 1 体は換羽中であった。換羽状態から採集時期を推定できるかどうかを探るため、既往情報を整理したものの判断は困難であった。さらに、ラベル上は♂とされるものの外見が♀型に近い個体が 2 体存在した。本種の色彩パターンや換羽に関するより細かな情報の蓄積が必要である。

ポスター発表 P-13\*

## 名古屋市におけるムクドリの食性把握～中心市街地と都市近郊部の比較～○○

加藤花織（名城大学）

近年、ムクドリの集団増が都市部に集中し、糞害や騒音といった問題が深刻化しているが、従来の追い払い対策は一時的な移動に留まり、根本的解決には至っていない。本研究では、採餌環境に注目し、名古屋市の中心市街地と都市近郊部のムクドリの増下から採取した糞を対象に、DNA バーコーディングを用いた食性解析を行い、その違いを比較検討した。

ポスター発表 P-14

## 黒目川のカルガモ繁殖様式～4 年間のカルガモ親子記録～

○長久保定雄（バードリサーチ会員）

埼玉県朝霞市を流れる黒目川において、発表者は 2022 年よりカルガモの行動と生態を、嘴や羽模様を用いたバイオメトリクス認証による個体識別法で継続観察してきた。4 年間で 31 組の親子を確認し、繁殖期前後の親個体も追跡した。雛の成長度合いを比較し誕生日を推測した結果、繁殖様式が明らかになりつつある。2025 年には早期育雛放棄や雛混ぜなど例年にない行動を記録し、さらに親離れ後の雛 2 羽を長期追跡することに成功した。本発表では 2025 年の詳細な観察を中心に、4 年間の成果を整理し黒目川におけるカルガモの繁殖様式を考察する。



## 省電力なカメラ付き巣箱の開発～見回りなしの巣箱研究を目指して～

○水村春香（富士山研）、武田和也（富士山研）、青木大輔（森林総研）

巣箱を用いた鳥類の生態調査は普遍的な研究手法であり、繁殖成績や食性など様々な基礎生態の解明に活かされてきた。近年巣箱内のカメラ撮影技術が発展しているが、その多くは動作期間に制限があり、長期観察には電池交換を必要とする。本研究は、省電力で安価な IC 機器の活用により、2 か月間見回りなしで 30 秒に 1 回タイムラプス撮影可能なスマート巣箱を開発した。これを用いてキビタキの営巣を 3 例追跡することに成功したので、その結果と今後の課題を報告する。従来の数十分おきやモーション検知時の撮影では評価できない行動の解像度が得られ、繁殖生態のみならず繁殖行動学的な解析の幅が広がると期待される。

## チュウサギの行動圏把握の「試み」

○○橋本 啓史・東 実優（名城大・農）・芳賀 大・西村 祐輝・金澤 智・新實 豊（（公財）日本野鳥の会愛知県支部）・小丸 奏（岐阜大院・連合農学）

愛知県蟹江町には日本最大規模と考えられるチュウサギを中心としたサギ類のコロニーが、高速道路のインターチェンジ内という特殊な環境に形成されている。2025 年 6 月 29 日に蟹江 IC 内でチュウサギ 2 羽に GPS ロガーを装着して行動圏や採餌環境を明らかにすることを試みた。1 羽目は 4 日間の追跡で最長トリップ長は 244m、もう 1 羽は 5 日間の追跡で最長トリップ長は 2,260m であった。これがこのコロニーのチュウサギの一般的な行動圏と考えるには狭すぎるので、補足的に 8 月の夕方に 4 か所の水田地帯から塀に帰る方角の調査も行ったところ、少なくとも北側は約 7km の行動圏があることがわかった。

## 飼料用トウモロコシ畑を利用したツバメの集団ねぐら

○小畑直也

ツバメが夏秋に形成する集団ねぐらには一般的にヨシ原が利用されるが、鳥取県琴浦町では飼料用のトウモロコシ（デントコーン）畑が利用されていることを 2017 年以降確認している。トウモロコシ畑の場合、生育状況や刈り取りなどによってねぐらとして利用できる期間に限りがあることに最大の特徴がある。刈り取り当日のツバメの様子やその後のねぐらの変遷を中心に紹介する。

ポスター発表 P-18\*

## ウチヤマセンニュウが本土部のヨシ原に立ち寄るのはなぜか

○大槻恒介（長崎大・院・水環）、知花峻輝（長崎大・院・総生）、山口典之（長崎大・院・総生）

ウチヤマセンニュウは島でのみ繁殖する希少な夏鳥だが繁殖後の生態は不明点が多い。本研究では、2024年7～9月に長崎県諫早湾干拓調整池の葦原で捕獲調査を行い、幼鳥53羽（うち再捕7羽）と成鳥1羽を確認した。幼鳥では体羽の部分換羽が滞在に伴い進行し、換羽開始は7月下旬、完了は8月下旬と推定された。また再捕個体ではSMIや脂肪量の増加がみられ、渡り前のエネルギー蓄積の可能性が示唆された。さらに全国の標識記録の解析から、繁殖島近くの本土部の葦原が繁殖後の重要な滞在地として各地に存在することが確かめられた。

ポスター発表 P-19\*

## 長崎県諫早中央干拓の越冬タゲリの性・齢について

○知花峻輝

性・齢の識別を可能にすることは、種の生態を深く知るうえで重要である。タゲリの繁殖地であるヨーロッパでは、様々な研究がされており、外部形態と性・齢の関係について調べられている。しかし、日本はヨーロッパから離れた極東域にあり、非繁殖地であるため、ヨーロッパでの識別が行えるかよくわかっていない。発表者らは、長崎県諫早市で本種の捕獲を行った。年齢においては、ヨーロッパ集団と同じような特徴を有していることがわかった。性別においては確定的な証拠を得ていないものの、ヨーロッパ集団の識別を踏まえて推定した。今回は、長崎の越冬集団の外部形態と性・齢の関係について発表する。

ポスター発表 P-20\*

## なぜ鳥は羅網してしまうのか／事故DBの分析による原因報告

○内田理恵（a-tori-net Project）

霞ヶ浦周辺のはす田で深刻な水鳥によるレンコン食害。他方、食害対策として導入した防鳥ネットにより野鳥の羅網事故が多発している。予測不能で観察困難な野鳥羅網事故を、基本的な事故調査の手法を用いてデータベース化して解析、簡易的な実証実験による検証で判明した羅網事故の原因・実態を報告します

ポスター発表 P-21\*

## 消音構造は飛翔力にどのような影響を及ぼすのか、少し検証をしました。

○鈴木理央

本発表では、フクロウ目に見られる消音構造を模した2種類の翼の模型と、ハト目やスズメ目などに一般的な翼の模型の計3種類を用いて、羽ばたいた際の風量や力強さに違いが生じるのかどうかを、ふと気になったことをきっかけに簡単に検証してみました。

ポスター発表 P-22

## クロサギにおける採餌行動の季節比較

○植村慎吾 (バードリサーチ)

クロサギには黒色型と白色型の二型があり、低緯度地域ほど白色型の割合が高くなる。羽色によって採餌方法に違いがあるという国外での先行研究がある。国内は、黒色型と白色型に採餌環境や採餌方法の違いはみられなかった。夏と冬の採餌行動を比較すると、データが多く得られた黒色型については冬の方が夏よりも限られた環境を採餌に利用していた。また、採餌行動については冬の方が夏よりも動きが少ない傾向にあった。

ポスター発表 P-23\*

## ベランダコミュニケーション 2025

○小杉美樹

年々緑地が減っていく都心のマンションのベランダで、ヒヨドリをはじめとする野鳥のサポートをする中で気づいたことをまとめています。今年はヒヨドリが多めで、季節での行動変化や鳴き声の変化など。少しオナガの営巣についても触れています。画質はよくありませんが、QRコードで実際の動画なども見ることが出来ます。

ポスター発表 P-24

## 環境が異なる FSC 認証林における鳥類の比較と評価

○高木憲太郎 (バードリサーチ) ・天野陽介 (WWF ジャパン)

多様な環境を有する東白川村 FSC 認証林の鳥類にとっての価値を評価するために、村内の FSC 認証林を3つのカテゴリー、低木のある針広混交林、ササのある針葉樹林、下草のない針葉樹林に分類した。各カテゴリーごとに4地点、計12地点でスポットセンサスを2025年5-6月に4回ずつ実施し、環境選好性などをもとに記録された鳥類を分類し、それをもとに森林の評価を行った。

---

バードリサーチ鳥類学大会 2025 講演要旨集

発行：特定非営利活動法人 バードリサーチ

E-mail： [br@bird-research.jp](mailto:br@bird-research.jp)

URL： <http://www.bird-research.jp>

---